

横浜市曹洞宗善光寺「海外留学僧派遣育英会」の目的と実際

開創十五年檀家二千に 発展した新寺が打つ 海外開教への布石



ちようど十年前の八月、本誌が『現代を生かす寺』この新寺建立に学ぶものは何か』と紹介した、横浜市港南区日野町の曹洞宗善光寺が、最近またも新たな企てによって、大きく脚光を浴びている。無からスタートして、善光寺を建立——今では、檀家数二千百余の横浜一、二の規模に育て上げた黒田武志住職(四十七歳)が、『世界に通用する仏教僧を育てたい』と、一カ寺の企画としては前代未聞の『海外留学僧派遣育英会』を発足させたのだ。

一カ寺単独で留学僧派遣

仏教会、あるいは宗門・教団の事業なら、いざ知らず文字通り一カ寺、一僧侶個人が、単独で宗教留学生制度を設けたのは、文字通りの快挙！

『宗祖を通して釈尊に還る』を、宗教生活の帰趨とする、住職・黒田武志師の道心の強さ、激しさはいままでもないが、善光寺が、

短年月に、それだけ力をつけていたのか、と改めて感心させられる。

善光寺の成長・発展の軌跡については、あとでまた迎えるとして、昨五十九年一月にブリントされた「宗教法人善光寺海外留学僧派遣育英会」の設立趣意書から、一部抜粋して転記してみることにしよう。

『善光寺を開創して十五周年（昨年一月現在）を聞きました。ゼロからの出発ではありませんが、法輪転ずるところ、食輪自ら転ず

られております。これ正に仏天の御加護と大方の諸大徳諸賢の御協力御支援の賜物で感謝にたえないところであります。（略）

いまや人類は宇宙時代に入り、時間的にも空間的にも距離は著しく短縮され、世界はあたかも一国の親を呈しておりますが、反面、人類はかつてない不安と絶望の危機に見舞れております。これは明らかに現代社会の悲劇であり、今日ほど仏陀釈尊の教法宣布を必要とするときはないのであります。



『世界に通用する僧侶を育てたい』と黒田武志住職

しかるに、わが国は世界最大の仏教国でありながら、仏教界は遺憾ながら、世界の大勢に即応して教化の実を挙げる態勢に欠けております。ここに海外生活を通して広く世界に活眼を開く



留学僧第1陣の得度式。左から梅田尚平師、田中智誠師

人材育成の重要性を痛感するものであります。よって善光寺は開創十五周年を期して報恩行の一端として、海外に留学僧を派遣し、人材の育成をはかり、もって、仏教を振興し、世界の平和、人類の進運に寄与せんことをねがい、海外留学僧派遣育英会を設立したものであります。』

補足すれば、超宗派（場合によっては僧籍がなくてもいい）で集めた志望者の中から、学業操行ともに優秀で道心堅固、これならと

折紙つきの人材をえらんで、留学させるが、そのための旅費、生活費は、すべて善光寺が面倒をみようという趣旨である。

すでに、第一期の派遣留学僧一人が決定、去る四月に、タイ国バンコックのワット・パクナムに入寺—五月一日には得度式、同三日には布薩式を、それぞれ終えている。

これは、戒律のきびしい上座部仏教の僧院生活を一年間（もしくはそれ以上）実地に体験し、わが国の仏教との相互理解を深めるためだが、ワット・パクナムは、黒田師自身がかつて修行したことのあるゆかりの寺（昭和四十—四十二年）でもある。



募集から留学僧決定までの経過は、昨五十九年秋、善光寺から本山僧堂と地方僧堂、並びに仏教あるいは宗教学部のある全国二十いくつかの大学

に募集要項を送ることに始まり、論文その他慎重な審査のすえ、最終的に選ばれたのが、黄檗宗の田中智誠師（三十六歳。立命館大卒。宇治黄檗山禪堂に掛錫。のち、滋賀県正瑞寺に入寺）と、浄土宗の梅田尚平師（二十九歳。仏教大卒。総本山知恩院で伝宗・仏戒道場成満）の二人だったわけなのである。

そして、現在、引き続き、第二期生を募集中（締め切りは六十一年一月十日）であり、三人（予定）が選ばれて、今度はアメリカのロサンゼルス禅センターに派遣される。

同センターは全米に十二、イギリスのロンドンにも支部を持ち、信者約二万人。米人出家僧と在家信徒共同体で、開創（十八年前）主管は、黒田師の実兄・前角博雄師（昭和六十年生まれ）である。

黒田師も、タイのワット・パクナムでの修行ののち、自身、この禅センターにも駐在、北米曹洞宗開教師（昭和四十二—四十四年）として、参禅指導に当たっている。

ちなみに、善光寺海外留学僧派遣育英会の陣容は、理事長が黒田師で、常務理事が宝泉寺住職で、前総持寺副監院の佐藤俊明師。仏教界代表、学識経験者、善光寺檀徒代表で構

成される理事が六人、監事二人。これら役員は無給であり、ほかに事務担当の幹事が二人、名誉顧問には、永平寺、総持寺、両大本山の貫首が名を連ね、駒大総長など顧問十人、参与六人の顔ぶれも、僧俗各界の一人者を網羅して、バラエティ豊かである。

MONASTIC CENTER

黒田師は口ぐせのように、以前から、こういっている。

「五十人の道心堅固な若手の僧侶が、街社会に出て行けば、世の間は必ず変わります。その五十人が、いないのですよ」

それが今回の「世界に通用する僧侶」の育成—育英会のアイデアに結びついたわけなのだ。

いや、そういえば、黒田師は、昭和五十一年の六月ごろ、某仏教誌主催の「総持寺の海外布教を考える」座談会で、次のような提案をしている。

「外人の参拝も多く『国際禅苑』と呼ばれさせる総持寺が、名実ともにその俗称にふさわしい本山となるために、南方上座部仏教との交流をはかり、相互理解を深めるべきだ。



そのために、毎年、留学僧を送ってはどうか。当時、本山の出版部長だった前出の佐藤俊明師（現育英会常務理事）も、双手をあげて賛成。

提案はみのって、翌五十一年、三人の留学僧を本山から派遣することになったという。

同時に、総持寺に国際部が新設され、黒田師が推されて次長となった。

ところが、結果は龍頭蛇尾に終わり、事態に進展はなく、やがて立ち消えてしまう。

やりたければ、自分の寺、自分の力でやるほかない、と、黒田師は考えたのだろう。ただ、それに順序があった。善光寺の伽藍の整備が一段落してから、と、黒田師は腹づもりし、その通り実行したのである。

では、黒田師がどんな人物で、善光寺が、どんな経過を辿って今日の大をみたのか、十



年前の本誌の紹介記事と、多少重複するかもしれないが、あえて略述してみる。黒田師は、僧侶としては、いわば、サラブレッド。毛並みは、申し

分なく、いいのである。

生まれは、栃木県大田原市の光真寺で、父・

白純住職（昭和五十四年八十一歳で遷化）の六男。昭和十三年元旦に出生届。

この白純師が大変な傑僧で、まず、殿様寺で檀家が少なく、その上、先任の時代に火災で伽藍のほとんどを焼失してしまった光真寺を、庶民信仰（延命子育地藏尊・開運甲子大黒尊天）の霊場として再生——関東でも最大規模の寺に復興させた。

その後、いくつもの新寺を開山。総持寺顧問会会長、総持寺副監院、回復興局長、全日仏事務総長、曹洞宗審事院院長、同宗議会議

員、国際仏教興隆会常任理事（以下略）などを歴任し、遷化と共に、総持寺貫首から、西堂位を追贈されている。

こうした父の遺徳を受け、黒田師の兄弟も七人中実に五人までが寺院住職、あとの二人が、会社重役と大学教授という歩どまりのよさである。

（こんな環境に生まれ育った黒田師だ。自然に仏法者としての心構えは養われてくる。

また、知らぬ間に、人づくり、寺づくりのあり方、無一物中無尺蔵の生き方を学び、堅固な道心が培われたはずである。

伽藍は非常に大きいのが、経済的には決して裕福ではなかったという光真寺寺庭。

「学校には入れてやるが、卒業したら、一切かまわん。勝手にやれというのが父の教育方針でしたから、とにかく学校には入れてもらいました」

その学校が駒沢大だ。ここの大学院修士課程を黒田師は終え（三十七年）そのまま、総持寺に上山・安居する。九月送行（下山）して、十月には、永平寺に安居するが、体調をくずして一カ月で送行。

それから、日本全国の仏舍利塔巡拝を主旨

的とする托鉢行脚。三十八年には、新しく開設された特別僧堂第一期生として、総持寺に上山安居。この夏季接心会の折、黒田師はのちに善光寺の開基に請する、成寿堂本舗ナリス化粧品(現在は、株式会社ナリス化粧品)社長・故村岡満義氏及び現同社常務の東御飯氏ら社員一行と、文字通り運命的に出会い、その知遇を得ることになるのである。

この村岡氏の援助で、総持寺送行後、黒田師はインド仏蹟巡拝の旅に出、そこでまたも大切な人と出会う。現善光寺檀徒総代で、仲人にもなってもらった著名な建築家・伊藤喜三郎氏だ。

巡拝後は、前にも触れたが、タイに入り、ワット・パクナムで出家得度。上座部仏教僧侶として修行を積む。

帰国して、曹洞宗高階管長「秘書」を一年ほどつとめ、渡米して、ロサンゼルス禅センターに駐在開教。四十四年帰国早々、現在地での新寺建立を決意し、活動を開始するのだ。『大聖釈尊のお説きになられた生きた正しい教えを高揚し、世界平和と人類福祉の向上に貢献したいため』

と、その趣意書に謳っている。

無が有を生んだ新寺建立

善光寺の現在地は、日野公園墓地(十一万坪)の正門近く。ここに、昭和三十六年、林堅峰師(三重県福源寺住職。総持寺知客)が、黒田師の父・白純師の勧めもあって、小庵を建て、非公式に長光寺と号していた。

だが、寺号公称に至る以前に、林師は四十二年に遷化。四十四年二月、アメリカから帰ったばかりの黒田師が、そのことを知り、無限の将来性を秘めた立地条件のよさに、ま



長男武徳君の得度式(58年9月)。仏弟子の仲間入り

注目——新寺建立を決意する。

そこで、すでに人手に渡っていた小庵を、

直談判で、二百坪の地上権もろとも六百万円で譲り受ける。資金は、父・白純師を通じて、銀行から借りた四百五十万円その他である。

境内地は、いずれ必ず購入するとの地主との一札を加えて申請——異例の早さで、同四十四年十一月二十八日、宗教法入「善光寺」として、県知事の認証を得る。

ナリス化粧品社長・故村岡満義氏を開基に請し、父・白純師を開山としたのは、黒田師の謙虚さと、感謝・孝心の表れだろう。

特記すべきは、新寺建立の同じ年の十二月二日、前出の伊藤喜三郎氏夫妻と村岡氏夫妻の媒酌で、福井県常在院住職(当時、永平寺単頭)加藤照雄師の二女で、ナリス・村岡社長の秘書をしていた倫子さんと、黒田師が結婚したこと。

お二人の仲のよさ、寺庭での倫子さんの賢夫人ぶりは、つとに定評があるが、夫妻の間に、中三を頭に幼稚園児まで、男四人女二人と子沢山。うち、長男・武徳君(現中二)は一昨年、二男・泰志君(現小五)は、今年七月、それぞれ得度している。



カゲで寺庭を支える倫子夫人とともに

新寺の歴史がそのまま夫婦のそれと重なる。話を戻し、善光寺の伽藍整備の目ざましい足跡を、ごく表面的ながら辿ってみよう。

やはり、最初の成功は、開基家村岡氏と、ナリス化粧品社買有志から、一千万円の浄財喜捨を受けたことだろう。これによって、四十五年一月八日に地鎮祭——本殿と客殿三十五坪を、坪当たりの工費十万円建て、百六十四坪の土地を坪単位十万円で購入しながらも、その支払いは、四十五〜四十六年で完了している。

あとは、どんどん檀家が増え、善光寺が信用をつけていったので、楽である。

四十七年七月、本堂と客殿七十五坪の増築に踏み切り（工費千八百万円）同十一月二十八日、晋山式並びに落慶式。

すでに、檀徒は四百六十世帯を数えたか、ここで改めて五カ年計画を立て、檀徒数一千世帯を目指して、現在にも続く諸行事に熱を入れる。

五十年——本誌が取材した頃、同寺の檀徒数は八百世帯を越えていた——そして、さらに五十五年、檀徒数は千六百世帯に伸び、ここで、黒田師は、釈迦殿建立の誓願を実現化する。

設計は伊藤喜三郎建築事務所、施工は水沢工務店で、五十六年着工、翌五十七年十月四日に落慶式。隣接土地二百坪の買収を含めて総工費三億七千万円。続いて旧館の増築に五千万円。五十八年五月の工事完了と共に、同月二十八日に、開創十五周年記念式典。

今、善光寺の伽藍は、釈迦殿と旧館、不動殿とで、延べ三百六十坪程。このほかに、隣接の民家六戸を譲り受け、仏典、宗教書、美術、文学書など約一万五千冊の書庫にしているのだ。

何が善光寺を躍進させたか

善光寺躍進の秘密は、何だろうか？

第一に考えられるのが、立地条件のよさだ。日野公園墓地には約三万基の墓碑があるが、うち四割ほどは菩提寺を持たない。その一方、日野町にある六カ寺の住職は、黒田師以外兼職で、ウイークデーは寺にはいないのである。加えて、黒田師は、葬儀を頼まれても、「お金はいいのです。誠心誠意やらしていただきます」を、モットーにしていた。自然、日野墓地周辺に十軒ほどある石材店や葬儀者の評判は抜群で、有形無形さまざまな協力が得られた。地域の人びとの受けも、すこぶるいい。口コミで噂はひろがり、加速度的に檀家が増えていったわけである。

葬式・法事を「誠心誠意」やるには、以前も今も同じことで、黒田師は、まず、その意味を説くことから始めるのだ。

お通夜には、生死について説き、葬儀に当たっては、曹洞宗の正規の法式に従って、「剃髪」で、煩惱をとり、導師が死者にかわって懺悔、三法に帰依、戒を守る。「授戒」の意義を述べ、肉親の死に揺れ動く遺族の気持ちを

「安心」に導く。

「安心あんじんを与えられねば、なんのための葬式かわかりません。仏法の原点にかえらねば」と、黒田師はいうのである。

もちろん、葬式・法事だけで明け暮れたわけではない。周囲に、いくつもの巨大団地をひかえた土地柄。そのほとんどをしめる若い世帯の「潜在的需要」を喚起し、それまで縁のなかつたお寺に魅き寄せるには、多様な行事を絶え間なく、くりかえし、続けなければダメだ、と、黒田師は考えるのだ。

そこで、最初にやったのが、鶴見女子大保育科の学生三、四人に手伝ってもらい付近の子どもたち呼びかけてひらいた日曜学校。檀家が増え、場所も暇もなくなったので、三年ほどで、これはやめたが、善光寺の定例行事は、年間を通じて、びっしりつまっている。ざっと列記してみるが、こんな具合だ。

一月——新年祈禱会 二月——節分会、開山忌、定例総代会 三月——春彼岸法会 四月——花まつり法会、婦人会総会、五月——婦人会研修会、不動明王大祭 七月——大施餓鬼会、棚経たなづね・お盆供養、本寺光真寺参拝、参拝旅行 九月——医事、身上相談、秋彼岸法会 十月——

お茶会 十一月——七五三祈禱会 十二月——成道会。

これら、どの行事でも黒田師は必ず法話をすることにしているし、福引きやバザー、あるいは芸能人を呼んでの催しもする。

寺に親しみを持ってもらい、寺と檀信徒および檀信徒相互の心のふれ合いを深めてもらうための手段である。

ほかに、写経会しやくけい 毎月第一土曜日 参禅会 第二土曜日 仏典研究会 第三土曜日 日茶道教室 同第一・第三土曜日 書道教室 同第二・第四土曜日 (参禅会とは時間が違う) 少林寺拳法 第一・第三土曜日。

まさに、フル・回転である。関係団体も、次のように多彩であり、行事をお寺とタイアップしたり、独自で行ったりしている。

成寿山善光寺護持会、回不動明王奉讃会、同参禅会、同写経会、同甲子大黒天講、同青年会、同婦人会、同福祉相談所、同子供会、同茶道会、同仏具会。

「書道、お茶など、どの教室もそうですが、学ぶのも檀徒なら、指導者も檀徒なのです。もう、これだけ檀家がありますと、あらゆる分野の専門家が揃うわけです。さまざまな

職業での第一人者が、私のプレーンでいてくださるからこそ、善光寺はここまでこれたのだと思います。人との出会いの大切さを痛感いたしますね。そして、人づくりこそ寺づくりなのだ、と」(黒田師)

行事のうち、特記すべきは、毎年九月、敬老の日に行われている無料健康診断だろう。

同寺総代で、防衛医大教授の中村治雄氏が担当で、檀徒を対象に、もう十年以上も続けられてきた。そのカルテは、すべて、お寺に保存されてある。

善光寺を、ひらかれた寺ひらかれたてらがあるいは、活き活きとした対話の場たいわのまとして盛り立てているもう一つの力は、事務局を構成する檀徒たちである。初め十人によってつくられた事務局も、今は六十人近くにふくれ上がり、その職業も、会社経営者、医師、司会者、デザイナー、タクシー運転手と、なんでも間に合う。大きな行事の折、典座寮てんざりょう(台所)をとりしきるのも、檀徒の主婦たちだ。

善光寺の釈迦殿、不動殿には本尊釈迦牟尼仏、身代わり不動明王を初め、円空仏、中国元朝期の聖観世音菩薩などに、南方からの渡来仏を含め、美術的、文化財的にもすぐれた

価値を持つ『仏さま』が、多数安置されている。黒田師が、それぞれの『縁』で、時間的にもばらばらに勧請したものが、

「これら仏さまのご加護があればこそ、善光寺は発展してこれたのだと信じております」

黒田師は、合掌して、祈る様子にうなづいた。美術的、文化財的価値といえは、善光寺には、故浜田庄司氏の作品など、すばらしい陶磁器が、沢山飾られてある。

これらも、檀家との濃密な交流から、善光寺に持ちこまれたものなのである。

常に未来を見つめて

人づくりこそ、すべての基礎——と信ずる黒田師の情熱の一端が、このたび、留学僧派遣育英会という具体的な形を得た。

第一期生として、すでに、タイの僧院に入寺・修行中の田中智誠師と、梅田尚平師は、留学生を応募したときの論文で、こんな覚悟を述べている。ほんの一部分だけだが、乱暴に抜すいて紹介しておこう。

『やれ制度仏教だ、儀式仏教だと呼ばれる日本とは好対照をなす南方仏教徒の姿に触発されて自己の自分を見つめ直すことは、私に

とっては文字通り再出家の覚悟と言えぬ。(略)

人間一人で出来ることは時間的・空間的に限られるので、互いに知恵を出しあって人類救済の大目標に向かって大誓願をたてようではないか。微力ながら先駆者の足跡を継承して菩薩願行に出むかんとする一人である。(田中智誠師)

『私は、法然上人の三学非器に至るまでの思想的変遷を、この機会に実践してみ、なぜ聖道門を捨てて、浄土門に帰入せられたのか、一度外側からみて反省する必要があるのではないかと考えたのである。』

私がタイに留学して学びたいことは、所謂三蔵と三学による自己の苦よりの解脱、無明の滅却をめざすものであり、中道と八正道の実践により実存の構造を正しく認識することにある。(梅田尚平師)

この二人の英才が、何を待て帰国するか楽しみだが、戻ってからの義務は一切ない。何をしようかと、勝手なのである。

黒田師はいうのだ。

「十年で、三十人、留学僧を送り出しました、私は、そのうちの五人が、文字通り世界に通用する僧として役立ってくればいいと

思っております。量より質です。それから、ゆくゆくは、外国からも留学僧をこちらに迎えたいと考えております。そこで、別院を建てる心づもりで、ここから歩いて十分ほどのところに、三百坪ほど土地を入手しました。欲しいと思つていたところに、ちよつど(と)いつていいかどうかはしませんが)不動産屋の檀家が倒産しましてね。一億円物件を半値でどうかと、逆に頼まれたのです」

とにかく、借金だらけだが、いくら金がないくても、やらねばならないことはやります、と、黒田師は、意気軒昂!

「檀家の方たちには、去年からお願ひしているのです。ご飯を一日に半杯だけ減らして、善光寺に布施してください。それで、僧を養います、と、極端ない方をすれば、私に本当の仕事させてくだされば、葬式なんか、タダでもいいのです、と」

お願ひもするが、善光寺は檀家を大切にす。檀家とのコミュニケーションを強めようと、善光寺では、一昨年、A5版六十四頁、八十頁の寺報『成寿』(季刊・不定期)を出している。これも、なかなか評判がいい。

(野火 晃)